



堀内さんと愉しむ四字熟語 第7回

「陽春白雪」ようしゅんはくせつ



文・写真：堀内 正範（ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長）

四字熟語のなかで、ノーベル文学賞受賞者の莫言氏が用いたこの「陽春白雪」ほどに明るいものは多くありません。2012年のノーベル賞授賞式の会場には莫言氏の隣に山中伸弥教授。日中の名士が並んだ受賞も明るいニュースでした。



莫言氏は恒例のストックホルム大学でのスピーチで、中国文学の現状を問われて「陽春白雪と下里巴人」（楚辞「宋玉対楚王問」から）と説明しましたが、通訳に意味が分からず、自ら「高級な白酒を好む人もいれば普通のを好む人もいます。それぞれ味わいがあるように文化の受容は多様化している」と補足して会場の笑声と掌声を誘っていました。文学者らしく格差ではなく多様性といっています。

「陽春白雪」は高尚な楚の音曲の名で、一方の「下里巴人」（巴蜀のひなびた里人）は通俗な音曲。「下里巴人」は数千人が和して歌うのに対して「陽春白雪」は数十人。自分の作品がどちらにも受け入れられている現状へのとまどいを莫言氏は率直に伝えていたのでしょう。

「三春之暉」（孟郊「游子吟」）は春三カ月の暖かい陽光のこと。長い旅に出る子どもが着る衣服（游子身上の衣）を縫う母の愛をたとえています。これに過ぎる暖かい衣はないでしょう。この詩を口ずさみながら中国の子どもたちは出立を思うのです。父については、李紳の詩「憫農」があります。こちらは日中の強い陽をあびながら畑の土に汗を滴らせて鋤をあつかう父。ひと粒ひと粒はみなその辛苦の成果「粒粒辛苦」であることを思うのです。「游子吟」（三春之暉）も「憫農」（粒粒辛苦）もともに中国の子どもたちがそらんじている詩であり四字熟語です。

春の季語に「山笑う」があって、子規にも「故郷やどちらを見ても山笑う」の句があります。春の訪れを察知して山が動き出す。木々がいっせいに際立ってくると山全体が「春山如笑」（郭熙「山水訓」から）といった姿になり、人の心もおおらかになります。春の「山笑う」から季節は「山滴る」（夏山如滴）へと移ります。

堀内さんと愉しむ四字熟語 第8回

「七月流火」しちがつりゅうか

文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

夏空のアンタレス 冬空のカノープス

夏の星空にかんする四字熟語に「七月流火」があります。盛夏を迎えて激しくなる「炎熱」の意味で用いられていたのですが、本来の意味合いは「向熱」ではなく「転涼」であるとして、誤用を指摘したのは天文関係の人たちだったようです。たしかにこの「火」はさそり座の α 星アンタレスのことで、農曆六月の南天に赤く輝いて「大火星」と呼ばれてきました。七月になると西空に傾いて沈んでゆく姿が「流火」で、『詩経』では「七月流火、九月授衣」とつないで秋涼の訪れを指すのが原義であるということです。

ことはアンタレスに赤い惑星の火星が大接近して、それに土星まで加わって、真夏の天体ショーで賑わいます。都会から離れてお出かけの折りにぜひスカイウォッチングを楽しんでください。

原義はそれとして、夏の生活感に親しい「七月流火」を誤用というなら「八月流火」を使おうというのが「現代漢語」派の意見です。八月には連日40度を超える四大火爐(かまど)都市の重慶市では、消暑法として水上麻雀が「七月流行」になっています。水辺に傘を立てて足元を冷やしながらスポーツとして熱中しています。流れに沿って延々とつづく傘の列は奇観であり涼しげです。



炎熱重慶市の消暑法は水上麻雀

冬の星空の四字熟語といえば「吉星高照」があります。月の現われない「春節」の夜、古人は三つの星を「吉星」(福・禄・寿)と呼んで、これから始まる一年での子宝と豊作と長寿の願いを懸けてきました。

異説はいろいろありますが、冬空に輝く三つの星というのはオリオン座の三星や冬の大三角形ではないようです。全天で最も明るい「狼星」(シリウス)とともに「狼より地に近くに大星があつて、これを南極老人星という。良く見れば治安、見えないと兵乱」(『史記「天官書」』から)とされています。この全天二番目に明るい「南極老人星」(カノープス、寿老人の化身)に長寿を祈ったようです。日本では地上すれすれに現われるためあまり知られておりません。



文・写真：堀内 正範（ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長）

夏草が群れているようすを「萃」といい、「拔萃」はそこから抜き出すこと。書物から優れた部分を抜き出すことによく使われています。「出類拔萃」は品格や才能がとくに抜き出すことの例えで、孟子は「その類を出、その萃を抜く」（『孟子「公孫丑章句」』から）といって孔子がとくに秀れている表現としています。

一方、「勁草」はしなやかで勁（つよ）い草のこと。「拔萃」のように平時に知られることはないのですが、猛烈な風が吹き荒れたあとに、吹き飛ばされたりしなかった勁い草が知られるということで「疾風勁草」（『後漢書「王霸伝」』から）がいわれます。困難な事情に遭遇したあとに、しっかりと意志堅固に処していた人が知られることに例えられます。

後漢王朝を築いた劉秀（光武帝）は、兵を率いて黄河を渡って河北に攻め入ったとき、故郷の潁川から従ってきた數十人がみな去ってしまったのに王霸ひとりが残っているのを知ります。そこで「子独り留まる。努力せよ、疾風は勁草を知らしめん」といって励ましました。

劉秀はのちに皇帝となり、王霸は北辺を平定して淮陵公に封じられています。ご存じの勁草書房の名はここから。未曾有の嵐だった先の戦争のあと、「信念をもって良書の出版を」との願いをこめて、安倍能成学習院長が命名したものです。

皇帝ともなれば晩年には職務に倦んだりするのですが、劉秀は「日復一日」の勤務を最後まで怠ることなく生涯を終えました。「日また一日」は事業の継続に意を尽くすことにいます。皇太子の荘が勤労の過ぎるのをみて「優游自寧」を求めたときにも、「楽しんでいるのだから疲れはしない」といって聞きませんでした。

西暦五七年二月初めに洛陽で六二歳で崩じましたが、直前の正月に東夷の倭奴国王の遣いの奉献を受けて「漢委奴国王」の金印を贈ってねぎらったのが最後の務めとなりました。日中交流の事績が、「日また一日」をまっとうした劉秀の姿とともに残ったのは歴史の幸運でした。



文劉秀は最後に会った「漢委奴国王」の遣いに金印を賜った（国宝）



堀内さんと愉しむ四字熟語 第10回

「鵬程万里」(ほうていばんり)



文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)



来る酉(とり)年にちなむ四字熟語をとりあげておきましょう。

はじめは「精衛填海」(せいえいてんかい)です。伝説時代の炎帝の末娘ジョア(女娃)は、東海で遊んでいて溺死したあと鳥に化身して、ひたすら西山から小石や小枝をくわえてきては海を填めようとしてました。先人はどうしてこんな作業をする哀切な女性を生み出したのでしょうか。その鳴き声から「精衛」と呼ばれ、「精衛填海」(『山海経「北山経」』から)は堅い意志をもって作業をつづけることにいわれます。魯迅は「題三義塔」で、精禽(精衛)が石を銜(くわ)えて東海を填めつづけるように、中日両国民が努めて溝を填めていくことに例えています。

次は「鴛鴦」(オシドリ)にちなむ「乱点鴛鴦」(らんてんえんおう)です。「おしどり(愛し鳥)夫婦」といえば仲のいいご夫婦のこと。ところが夜草陰で相手を取り替えて、昼間はむつまじいというのが実見者の話です。人の世にも夫婦を交換する例があつて、人生模様としておもしろいことから、中国では演劇化された馮夢龍「喬太守乱点鴛鴦譜」などが話題になって、「乱点鴛鴦」はよく知られています。わが国では鳥取県の鳥や50円切手で親しいですが、飼育係も認める生態で、「おしどり夫婦」には聞かせたくない本当の話です。

もうひとつ「鵬程万里」(ほうていばんり)を。鵬は伝説に現れる地上最大の鳥。鵬程は飛びゆく先の遥かなこと。そこで「鵬程万里」は前途の遠大なことにいいます。

『莊子』の巻頭「逍遙遊篇」には、北冥(北のはての暗い海)にすむ大魚の鯢(こん)が化して大鳥となり、この鵬が奮い立って飛び立ち、九万里ともいわれる天空を飛翔して南冥(天池)にいたると記されています。実社会に飛び立つ卒業生の前途を祝って用いられています。みなさんの前途にも大きな進展があることに期待して。





堀内さんと愉しむ四字熟語 第11回

「歳寒三友」

文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

春節(ことしは 1 月 28 日)が過ぎても二月の朝晩の寒さはまだ骨身にこたえます。そんな寒中にいるような厳しい人生の時期に、頼りになる三人の友がいたら心強いですね。唐の詩人白楽天は琴・詩・酒を「三友」としました。若い諸君ならワイングラスを傍らに、ギターを爪弾きながら、自作の詞で歌うといったところ。深い憂いも三友によって融かすことができるでしょう。

松と竹とは冬季にも枯れることなく、梅は寒さに耐えて花を咲かせます。それぞれに旺盛な生命力で生き抜く姿を愛でて、松・竹・梅を「歳寒三友」(王質『雪山集「送鄭德歸初吳中」』など)と呼んでいます。

NHKの連続ドラマ「梅ちゃん先生」で、末っ子の梅子が父から三人の子どもに松子、竹夫、梅子と名づけたいわれを聞かされて納得するシーンがありました。とくに雪中に花をつける梅には気品が漂います。そこで高潔の土に見立てて「雪中高士」と称えられています。



松竹梅は高尚な人格の象徴に



明代に作られた松竹梅紋の磁器



道真を追って京から太宰府に飛んだ「飛梅」

白楽天の「北窓三友」詩を読んだ菅原道真は、琴と酒は「交情浅し好去(さよなら)だ」と拝辞して、詩だけは「独り留まる真の死友」と認めて生涯の友としています。

太宰府へ左遷された道真を慕って京から飛んだという「飛梅」が天満宮に残されていて、春先に「東風(こち)」が吹くと、白い花を咲かせます。流離の地で怨念を残して亡くなった主人を思い起こして咲くというのは、梅ならではの物語でしょう。

道真は学業の神さまとして合格祈願の受験生の頼りにされ、東京の湯島天満宮では「学業守札」や「学業成就鉛筆」などがよく売られているようです。

松・竹・梅は日本では長寿の意味を添えて縁起がよく、ご存じのお酒の名前や、器物や衣装や建築の図案にもよく見かけます。松・竹・梅は「歳寒三友」ですが、大地が温もってから咲く桃・李・杏は「春風一家」といわれています。

堀内さんと愉しむ四字熟語 第12回

「春山如笑」(しゅんざんじょしょう)

文・写真：堀内 正範(ジャーナリスト・元朝日新聞社「知恵蔵」編集長)

村里の遅咲きの花々も咲きそろそろに、冬のあいだ睡っていた山が本格的な春の訪れを察知して動き出します。木々の芽がいつせいに際立ってくると、山全体が日また一日と華やいでひとまわり大きく見えてきます。次第に「春山如笑」といった姿態になって、それにつれて人びとの心もおおらかになります。

春の季語に「山笑う」があって、子規にも「故郷やどちらを見ても山笑ふ」の句が知られます。先人はこの国に特有の季節変化の前触れや特徴を季語として鋭く捉えて、折々に繰り返される生命の息吹きとの出会いを愛しんできました。「山笑う」は実感のこもる春の情景として待たれています。



春の季語「山笑う」は「春山如笑」(山水訓)から得た

北宋の画家郭熙は、山水画の名手でしたが、四時不同の山容の姿を巧みに捉えています(『林泉高致集「山水訓」』)。

「春山如笑」(山笑う)、「夏山如滴」(山滴る)、「秋山如妝」(山妝う)、「冬山如睡」(山睡る)まで、山の四季のたたずまいを表現しており、俳句ではこの詩からそれに見合う四つの季語を得ています。それぞれに味わいがありますが、ひとつとなると、やはり「春山澹冶にして笑うが如く」の「山笑う」でしょうか。



わが国の戦国武将のひとり甲斐に拠って天下をうかがった武田信玄に「春山如笑」と題する漢詩があります。越後の上杉謙信とは詩作の上でも負けず劣らず競っています。謙信の詩で有名なのは軍中の自作「九月十三夜」で「霜は軍営に満ちて秋気清し、数行の過雁月三更」…こちらは秋です。

信玄が軍旗に掲げた「風林火山」の「動かざること山の如し」の甲斐の山々が、睡りから覚めてうごめく気配に新時代への躍動を重ねています。詩の結句は「一笑靄然として美人の如し」と穏やかでやわらいだ美女の容姿に仮託していますが。

命日は4月12日で、甲府から遠望する南アルプスや八ヶ岳の態様は「春山如笑」にはまだ間があるようです。

←甲府(成都と友好都市)から天下をうかがった武田信玄